瞑想体験と魔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　永澤哲

2030年代以降の人類の霊性について考えるうえで、重要なポイントは三つある。

一番目は、薬物、遺伝子工学、BMIを用いた能力増強(enhancement)が進むと考えられることである（トランスヒューマン主義）。二番目は、経済的富の偏在が極限にまで進むことである。世界的カースト社会化が進むとともに、人類はヒュブリスとルサンチマンをめぐる、より根源的な思考を強いられることになる。三番目は、AIの物神崇拝である。

こうした状況に対して、チベットの伝統は、どのように答えることができるだろうか？「瞑想体験」、「魔」という二つのキーワードを通じて、考えたい。

チベットの伝統は意識の最も深い層から生じる体験を三つのカテゴリーに分けている。

1. 意識による体験（shes nyams）―空性（無分別）、楽、光明。シャマタ（「止」）、本

尊ヨーガ、脈管と風のヨーガなど、さまざまな瞑想技法によって生じる。

1. 意識の究極の境界における体験（shes pa mthar thug gyi nyams）―「十のしるし」。

死に近接する体験、および主に呼吸の制御を用いる瞑想と結びついている。

三、顕現の体験（snang nyams）―光の体験の深化。存在の土台と直接に結びついている。ゾクチェン・ニンティクおよびロンデの伝統に固有。

　この分類からすると、トランスヒューマン主義が「能力増強」の一部と考えている強烈な快楽（「法悦」）や光のヴィジョン体験は、最初の「意識による体験」に含まれることになる。またタントラの伝統においては、三種のいずれにも、執着してはならないとされる。

二番目の「魔」とは何か、という問いは、ヒュブリスとルサンチマン、怒り、暴力の問題とじかに結びついている。「魔」をめぐるチベット的な思考には、大きく三つの層がある。

一番目は、大乗仏教に共通の「四つの魔」の概念である。「魔」（bdud）は、ブッダの悟りを得るのを妨げるものであり、「死の魔」「煩悩の魔」「蘊の魔」「天子の魔」の四つからなる。

二番目は、女性行者マチク・ラプドゥンが創始した「切断」(gcod)の伝統における「四つの魔」の概念である。「物質的な魔」「非物質的な魔」「喜悦と煖の魔」「我執の魔」からなる。

三番目は、同じく「切断」の伝統における「神魔」(lha ‘dre)をめぐる思考である。人間は、みずからに利益をもたらすものを「神」、害をなすものを「魔」と呼ぶ。その土台にあるのは、善/悪、楽/苦の二元論である。自他、内部・外部の区別（「無明」）と我執から生まれる、この二元論を乗り越え、あるいは無化することができなければ、「魔」は生まれ続ける。「魔」は、二元論的な心からあらわれる顕現、投影に他ならない。

何かの対象を「魔」と認識し、それに怒りを感じる。この「魔」と怒りの二元論は、我執を崩壊させるような強烈な慈悲によって、消え去る。そのことによってはじめて、魔は光に満ちた法界に安らぐことができるのだと、チベットにおける降魔のエピソードは語る。

二元論から生まれる煩悩の本質は、光に満ちた知恵である。煩悩は、とぐろを解く蛇のように、二元論を超えた光り輝く知恵に変化する。ヒュブリスとルサンチマンに満ちた世界を乗り越えていく思考は、怒りをはじめとする煩悩を否定し、押し込めるのではなく、それを燃料として燃え上がる知恵と、すべてを平等に見る慈悲の結合から誕生するだろう。